



Title	フィリピン語を母語とする日本語学習者の条件表現「タラ」と「パ」の中間言語：学習者が生み出すキューとルール
Author(s)	Gaitan, Mary Ann Prieto
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58816
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について こちら をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	Gaitan Mary Ann Prieto
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(日本語・日本文化)
学位記番号	甲第84号
学位授与年月日	平成19年9月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	フィリピン語を母語とする日本語学習者の条件表現「タラ」と「バ」の中間言語ー学習者が生み出すキューとルールー
論文審査委員	主査教授 鈴木 睦 副査教授 津田 守 副査准教授 真嶋 潤子 副査准教授 堀川 智也 副査准教授 筒井 佐代

論文の内容要旨

第1章：本研究の目的とフィリピンの日本語教育の現状

本研究の目的は、日本語の条件文の形式として代表的な「タラ」「バ」「ト」「ナラ」の中から、学習者が最初に習う「タラ」と「バ」をとりあげ、フィリピン語を母語とする日本語学習者の「タラ」「バ」の習得過程とその困難点を中間言語理論の立場から考察することである。フィリピンでは、日本語教育の中心は初級レベルであり、中級・上級の日本語学習者は非常に少ないというのが現状である。

第2章：日本語条件文に関する先行研究

第2章では、日本語学の分野における条件文の先行研究、言語習得研究の分野における先行研究を紹介し、本研究の調査対象者が使用された種類の教科書を中心に種類の日本語教科書における、条件文の扱いを分析した。

第3章：フィリピン語の条件文に関する先行研究

フィリピン語について、条件表現だけを扱った先行研究はない。フィリピン語の条件表現「kapag」と「kung」についてフィリピン語の文法書の記述を見てみると、Schacter & Otones (1971)、森口(1985)、和泉(1982)、大上(1994)を紹介し、さらに、kapagとkungの用法を組み合わせさせて使われる動詞の相との関係を中心に分析した。

第4章：パイロットテスト 第5章：本調査の方法

本研究では、学習者が「タラ」「バ」の選択をどのように行っているのかを知るために、1) 文法テスト、2) 翻訳テスト、3) アンケート調査とフォロー・インタビューを行った。調査対象者は38名（G1：初中級レベル10名、G2：中級レベル17名、G3：上級レベル11名）のフィリピン語を母語とする日本語学習者である。「タラ」「バ」に関する調査対象となる学習者は、少なくとも初中級以上の学習者となるため、中級以降の学習者数が限られたフィリピンにおける調査としては全数調査に近い。

第6章 文法テストの分析結果：

「タラ」「バ」の選択傾向について学習者の「タラ」と「バ」の選択傾向について以下のことが明らかになった。

1. 文法テストは「タラ」「バ」「どちらも」の三肢から選択する問題で、母語話者の選択結果が「タラ」90%以上一致したのは、事実条件（1. 発見、2. 時間的順序）とモダリティ制約のある問題だけであった。
2. FJ学習者は「タラ」か「バ」のどちらかを選ぶ傾向があり、「タラ」と「バ」の用法には重複する用法についての理解が不十分である可能性が示唆された。
3. 学習者の「タラ・ストラテジー」の存在が指摘されているが、文法テストの結果は、その傾向は強くなかった。
4. 今回の文法テストの結果から、FJ学習者は、「タラ」と「バ」の1) 発見、2) 時間的順序、3) モダリティ制約のある用法の順に習得が進んでいる可能性を示唆する。

第7章 翻訳テストの結果

フィリピン語と日本語の条件文の違いから予想される母語からの言語転移が翻訳テストの結果では支持された。

1. FJ学習者は言語形式と条件文の表す意味の両方を手がかりとして、kapag と kung を選択しており、「タラ」を kapag、「バ」を kung に訳す傾向がある。
2. 文法テストでは事実条件文の正答率が高かったが、翻訳テストでは言語形式からの影響によって、kung を使った反事実条件に訳した学習者が多かった。
3. 非動詞文はどの kapag、kung と存在標識/形容詞のどの組み合わせでも使えるので間違いが起きない。

第8章 アンケートとインタビューの結果

アンケート調査とフォローアップインタビューにより、学習者がどのように「タラ」「バ」を使い分けているのか調査し、学習者が目標言語を使用するときの手がかりである「学習者キュー」と、学習者が作り出す文法規則である「学習者ルール」を分析した。

本研究で明らかになった学習者キューの特徴は、学習者が「タラ」と「バ」を使い分け

るために、言語形式に関わるキューと意味に関わるキューを使用する。「依頼」「過去」などの8種類のキューが、全レベルの学習者に共通して現れた。一方、学習者ルールの特徴に関して以下のことが分かった。

1. 文法テストの結果では「タラ・ストラテジー」は、目立った結果は見られなかったが、学習者ルールには、「タラ」はどちらでも使用するというルールが見られた。
2. 使用されるキューは同じでも、学習者の作りだすルールには異なる内容が存在する。レベルによって、使用されるルールには特徴がある。
3. 学習者のルールには、早い段階から安定してルール化されるものと、キューは早い段階から使用されるが、ルールは変わっていくものがある。言語形式を手がかりに「タラ」と「バ」の使用を区分するルールは、G1レベルの段階から使用されるが、意味に関わるルールはまだ区別できず、G2、G3レベルでは日本語の能力が高くなるに連れて変化し、整理されていく。

論文審査の結果の要旨

ガイタン氏の博士論文「フィリピン語を母語とする日本語学習者における条件表現「タラ」と「バ」の中間言語」は、フィリピン語を母語とする日本語学習者の「タラ」と「バ」の習得過程とその困難点をさぐり、学習者がどのような中間言語を生み出しているのかを考察した論文である。

現在の日本語を研究対象とした第二言語習得研究においては、中間言語研究が主流であり、本研究もその流れの中に位置づけることができる。中間言語研究とは、学習者の誤用を単に修正されるべき間違いとして捉えるのではなく、誤用も含めた学習者の生み出す目標言語の総体を中間言語と呼び、習得の段階に応じて変化していく体系として捉えようとするものである。

日本語の条件文については、日本語学の分野において研究が進んでいるが、第二言語習得の分野においては、英語・中国語・韓国語を母語とした日本語学習者についての先行研究はあるが、フィリピン語を母語とする日本語学習者についての研究は、おそらく本稿が初出であり、その意義は大きい。

調査の対象と分析方法

本研究は、初級後半から上級までのフィリピン語を母語とする日本語学習者38名を対象とし、初級後半、中級、上級の3レベルの学習者を比較するという横断研究の手法が用いられている。論文の構成は、まず先行研究を概観し、次に日本語の「タラ」「バ」に対応する「Kung」「Kapag」を対照した後、予備調査を経て本調査とその結果を述べるという手堅い手順となっている。調査対象者は38名であるが、フィリピンにおいては、条件表現の調査対象となる中級以上の日本語学習者がきわめて少ないという事情を考慮し、さ

らに、今回の調査がフィリピンの高等教育における中級以上の日本語学習者の全数調査に近いという点から、第二言語習得の分野における論文として問題がないと判断した。

本調査は、1) 文法テスト、2) 翻訳テスト、3) アンケートとインタビューの三種類に大きく分かれる。1) 文法テストは、学習者の誤用と正用の傾向をみるためのものであり、2) 翻訳テストは、学習者が日本語の「タラ」「バ」をフィリピン語の Kung と Kapag とどのように対応させているかをみるためのものである。3) アンケートとインタビューは、学習者自身がどのようにして「タラ」と「バ」を使い分けているのかを問うものである。

文法テストだけを分析対象とした先行研究が多い中で、翻訳と学習者自身の声を加えた三方向の基礎資料を分析対象とし、各資料間の関係を検討したことから興味深い結論が得られている。特に第8章では、学習が「タラ」「バ」の使い分けの手がかりとしている言語形式や意味概念を「学習者キュー」として取り出し、それらの手がかりが学習者の日本語能力が高くなるに従って変化していく様子が分析されている。また、それらのキューから導き出されて実際に学習者が使用する規則を「学習者ルール」と呼び、その分析結果から、同じキューであっても学習者によって異なるルールが導きだされていること、ルールそのものも日本語能力が高くなるにしたがって整理されていくことが示されている。

本研究の意義と問題点

本論文では外国語の学習においては母語だけでなく、日本語よりも先に学習された言語が大きく影響を及ぼすことを三方向から得られた資料を用いて具体的に指摘しているという点で大きな意義をもっている。日本語を対象とした第二言語習得研究では、学習者の第一言語である母語と対象言語である日本語との関係を中心にこれまで議論されてきたが、フィリピンの場合のように第一言語であるフィリピン語以外に日常的に英語が使用されるような言語環境においては、母語からの影響と第二言語である英語からの影響のどちらも大きく、しかも言語テストの方法によって異なる結果が観察されるという指摘は、重要である。日本語教育の改善という視点から見ても、本論文の調査結果から受ける示唆は多い。今後、直接法と英語を媒介語とした日本語教授法を再考し、母語による文法解説の必要性や翻訳という手法を取り入れることの是非等、色々な方向に研究を発展させていくことが可能である。

フィリピンの日本語の教育においては、日本語だけを用いた直接説法が使用されるか、あるいは英語を媒介語とした授業が行われており、教科書の文法解説も英語で書かれていることが多い。学習者は、教室内や教科書で学習したことがらだけでなく、自分自身で試行錯誤しながら「学習者ルール」を作り上げて行くが、日本語の文法テストに関して行われたアンケートとインタビューの結果では、フィリピン語の Kung と Kapag と関連づけたルールを構築した学習者は少なく、英語の If と When と関連づけたルールを構築した学習者が多いという結果が得られている。フィリピンの学習者は、母語の文法ではなく、英語

を日本語と対照している可能性が高いのではないか。また、日本語だけで行われた文法テストにおいてはフィリピン語からの影響は見られないが、翻訳テストではフィリピン語からの影響が観察されるという本論文で得られたもうひとつの結果とあわせて考えると、フィリピン語を母語とする日本語学習者にとって、英語・フィリピン語の果たす役割や日本語の教育方法との関係について、さらに大きな仮説を提唱することも出来たのではないかと思われる。

その他、審査委員からは、1) 要約の書き方が不十分で本論文の結論がうまく反映されていないこと、2) 調査対象となった大学の一校についての記述が、第一章のフィリピンにおける日本語教育の概説部分で言及がないこと、3) 誤字等が残っていること等の指摘があった。また、日本語・フィリピン語・英語の三言語間の条件表現に関する対照研究がさらに必要であるという指摘もなされたが、言語の対照研究はそれ自体が非常に大きな研究分野であり、中間言語研究を目的とする本論文の筆者にその全ての責を負わせることはできず、またこの論文の価値を損なうものではないという点で委員会の意見は一致した。

以上の審査の結果、本委員会は、本論文が博士（日本語・日本文化）の学位に相応しい業績であるという結論に達した。